

広島市における感染症発生動向調査結果について (2003 年)

生活科学部

はじめに

平成 11 年 4 月、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」(以下「感染症法」という。)が施行され、感染症発生動向調査事業が全国的規模で実施されている。広島市では、13 年 4 月から衛生研究所に感染症情報センターを設置し、感染症情報の解析、提供を行っており、今回、2003 年の広島市における感染症患者発生状況をまとめたので報告する。

方法

1 対象疾患

平成 15 年 11 月、感染症法が改正され、動物由来感染症である四類感染症が創設され、従来の四類感染症が新四類感染症と新五類感染症に分類され、対象疾患も従来の 74 疾患から一類感染症(エボラ出血熱等 7 疾患)、二類感染症(急性灰白髄炎等 6 疾患)、三類感染症(腸管出血性大腸菌感染症 1 疾患)、四類感染症(E 型肝炎等 30 疾患)、全数把握対象の五類感染症(アメーバ赤痢等 14 疾患)及び定点把握対象の五類感染症(インフルエンザ等 28 疾患)の合わせて 86 疾患となった。なお、データの集計等は、改正された感染症法に基づいて行った。

2 患者情報の収集

全数把握対象の感染症については市内医療機関から、定点把握対象の五類感染症については定点医療機関から週単位又は月単位で、各行政区に置かれている保健センターに届出又は報告される。各保健センターでは、感染症発生動向調査システムにより患者情報の入力処理と感染症情報センターへの報告処理が行われ、感染症情報センターでは全市分の集計処理を行った。全国情報は、中央感染症情報センター(国立感染症研究所)から還元されるデータを用いた。

3 定点医療機関

定点把握対象の五類感染症については、定点医療機関(患者定点)から疾患区分により週単位又は月単位で報告される患者発生情報を収集した。市内に置かれた患者定点の内訳は、インフルエンザ定点(小児科定点を含む) 37、小児科定点 24、眼科定点 8、性感染症定点 9、基幹定点 7 である。

4 調査期間

平成 14 年 12 月 30 日～平成 15 年 12 月 28 日(2003 年第 1 週～第 52 週)。

結果

1 全数把握対象疾患

医療機関から届出のあった疾患は、二類感染症は細菌性赤痢及び腸チフス、三類感染症は腸管出血性大腸菌感染症、四類感染症はオウム病、つつが虫病、レジオネラ症の 3 疾患、五類感染症はアメーバ赤痢、ウイルス性肝炎、クロイツフェルト・ヤコブ病、劇症型溶血性レンサ球菌感染症、後天性免疫不全症候群、先天性風しん症候群、梅毒、破傷風の 8 疾患で、合わせて 14 疾患であった。一類感染症については届出がなかった。2003 年における各疾患の届出数を表 1 に示した。比較的届出数の多かった疾患は次のとおりである。

(1) 腸管出血性大腸菌感染症

24 人の届出があり、このうち 10 人が集団事例であった。月別では、集団事例が発生した 10 月が 11 人と最も多く、それ以外では 7 月～8 月の夏季に比較的発生が多く、8 人の届出があった。血清型別では、0-157 が 18 人(75.0%)、0-26 が 5 人

表 1 全数把握対象疾患の届出数(2003 年)

類型	疾患名	届出数
二類	細菌性赤痢	3
	腸チフス	1
三類	腸管出血性大腸菌感染症	24
四類	オウム病	1
	つつが虫病	7
五類	レジオネラ症	2
	アメーバ赤痢	1
	ウイルス性肝炎	11
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2
	後天性免疫不全症候群	5
	先天性風しん症候群	1
	梅毒	5
	破傷風	1

(20.8%), 0-111 が 1 人 (4.2%) であった。年齢階層別では, 集団事例が学生寮で発生したことから, 15~19 歳が 11 人と最も多く, 次いで 5 歳未満が 5 人, 20~24 歳が 4 人であった。

(2) ウイルス性肝炎

11 人の届出があり, 病原体別の内訳は, A 型 6 人, B 型 5 人であった。なお, 平成 15 年 11 月の感染症法改正により, 従来の急性ウイルス性肝炎のうち, A 型及び E 型は四類感染症に新規の疾患として追加され, B 型, C 型, D 型などは五類感染症のウイルス性肝炎として従来の急性ウイルス性肝炎から変更になった。しかし, 6 人の A 型の肝炎は, すべて感染症法改正以前に届出されたもので, したがって表 1 中では五類のウイルス性肝炎として扱っている。

(3) つつが虫病

7 人の届出があり, すべて 10 月以降の届出であった。また, 年齢別では, 7 人のうち 6 人が 60 歳以上であった。

(4) 後天性免疫不全症候群

5 人の届出があり, すべて無症候性キャリアであった。性別では, 男性 4 人, 女性 1 人であった。

(5) 梅毒

5 人の届出があった。内訳は, 無症候 2 人, 早期顕症 (期) 1 人, 晩期顕症 2 人で, 性別では男性 1 人, 女性 4 人であった。

2 定点把握対象五類感染症

(1) 週単位報告疾患

インフルエンザ定点, 小児科定点, 眼科定点及び基幹定点から毎週報告される 21 疾患の報告数を表 2 に示した。年間の定点当り累積報告数をみると, 感染性胃腸炎の 425 人が最も多く, 続いて手足口病 198 人, インフルエンザ 153 人, 水痘 109 人, 流行性角結膜炎 66.9 人, A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎 60.0 人, 突発性発しん 47.1 人などとなっている。報告数が比較的多く, 年間の推移に特長が認められたインフルエンザ, 咽頭結膜熱, 感染性胃腸炎及び手足口病について検討した。これら 5 疾患について, 広島市と全国における週別の定点当り報告数の推移を図 1 に示した。

a インフルエンザ

年間の定点当り累積報告数は 153 人で, 前年の 258 人と比べ前年比 0.59 と減少した。2002 / 2003 年シーズンは, 2002 年第 49 週に定点当り 2.54 人

表 2 定点把握対象五類感染症患者報告数 (週単位報告分) (2003 年)

疾患名	報告数 ()内は定点当り 累積報告数
インフルエンザ	5,677 (153)
咽頭結膜熱	225 (9.42)
A 群溶血性レンサ球菌咽頭	1,439 (60.0)
感染性胃腸炎	10,201 (425)
水痘	2,604 (109)
手足口病	4,749 (198)
伝染性紅斑	412 (17.2)
突発性発しん	1,130 (47.1)
百日咳	17 (0.69)
風しん	15 (0.61)
ヘルパンギーナ	814 (34.0)
麻しん	9 (0.37)
流行性耳下腺炎	637 (26.6)
RS ウイルス感染症	61 (2.54)
急性出血性結膜炎	8 (1.03)
流行性角結膜炎	534 (66.9)
細菌性髄膜炎	11 (1.56)
無菌性髄膜炎	125 (17.8)
マイコプラズマ肺炎	98 (14.0)
クラミジア肺炎	0 (0.00)
成人麻しん	0 (0.00)

と例年より早く流行期に入った。流行のピークは 2003 年第 3 週 (定点当り 36.4 人) で, 以降減少し終息に向かった。

b 咽頭結膜熱

年間の定点当り累積報告数は 9.42 人で, 前年の 6.17 人と比べ前年比 1.52 と増加した。例年と同様に 7 月~8 月の夏季に増加し, 第 32 週に定点当り 0.58 人と年間の最高値を示した後は減少傾向で推移した。しかし, 例年と異なり 11 月~12 月にかけて再び増加した。

c 感染性胃腸炎

年間の定点当り累積報告数は 425 人で, 前年の 375 人と比べ前年比 1.13 とやや増加した。年間の累積報告数は, 小児科定点報告対象疾患の中で最も多かった。年初から報告数が増加し, 第 10 週にピーク (定点当り 18.8 人) となった後は減少し, 夏季は低い水準であった。2002 年より 3 週間程度遅れて第 46 週ごろから再び増加が始まり, 第 51 週に定点当り 31.6 人のピークを記録した後は減少した。

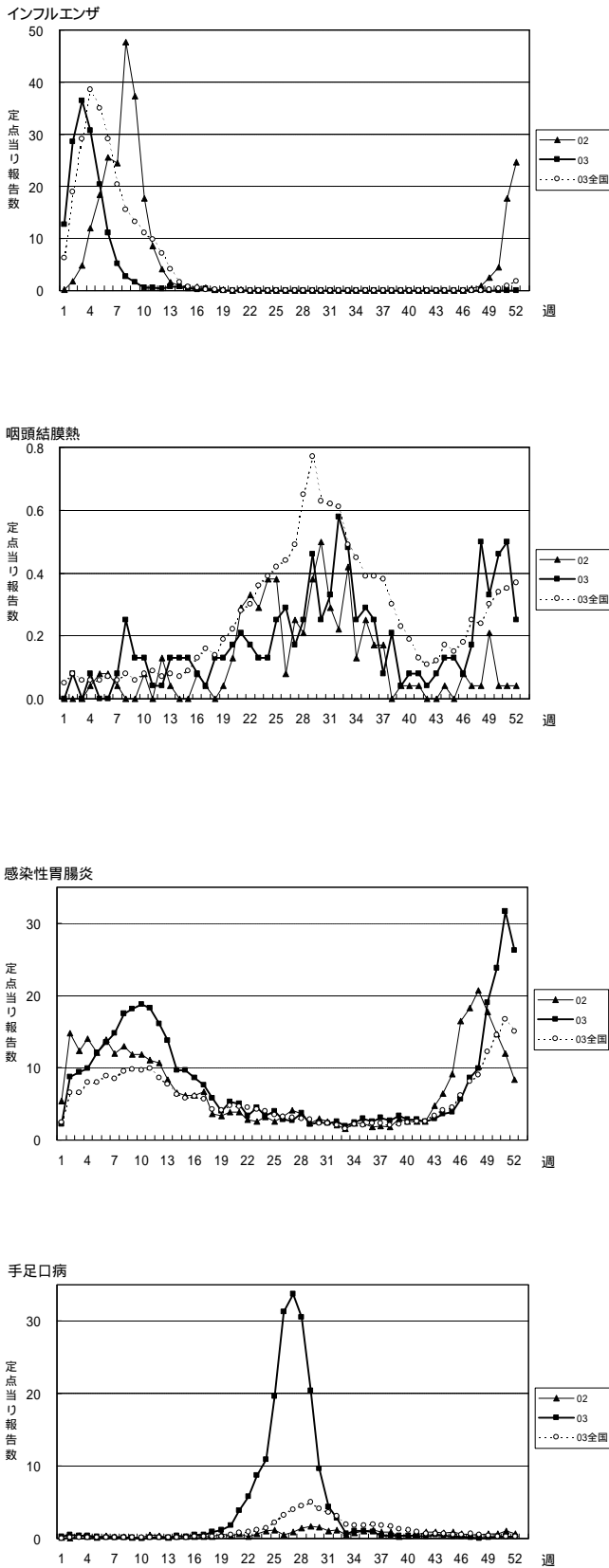


図1 定点当り報告数の週別推移

表3 定点把握対象五類感染症患者報告数 (月単位報告分) (2003年)

疾患名	報告数 ()内は定点当り累積報告数
性器クラミジア感染症	229 (25.5)
性器ヘルペスウイルス感染症	89 (9.90)
尖圭コンジローマ	39 (4.32)
淋菌感染症	175 (19.4)
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	554 (79.1)
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	363 (51.9)
薬剤耐性緑膿菌感染症	37 (5.28)

d 手足口病

年間の定点当り累積報告数は198人で、前年の31.6人と比べ前年比6.26と大きく増加した。年間の累積報告数は、小児科定点報告対象疾患の中で感染性胃腸炎について2番目に多かった。

第19週に定点当り1人を超えた後増加し、第24週に感染症発生動向調査事業開始以来(昭和56年11月~)の最高値の定点当り11.0人を示した。(2002年までの最高値は、1995年第29週の定点当り9.20人。)その後も増加を続け、第27週にピーク(定点当り33.7人)となった後は減少した。

(2) 月単位報告疾患

月単位で報告される定点把握五類感染症で性感染症定点から報告される性感染症4疾患及び基幹定点から報告される薬剤耐性菌感染症3疾患の報告数を表3に示した。

a 性感染症

性感染症4疾患のうち、年間の定点当り累積報告数が最も多かったものは、性器クラミジア感染症の25.5人で前年比0.84、次いで淋菌感染症の19.4人で前年比0.77であった。性器ヘルペスウイルス感染症と尖圭コンジローマを加えた性感染症総数は、前年比0.84とやや減少した。

b 薬剤耐性菌感染症

年間の定点当り累積報告数は、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症が79.1人と最も多く、次いでペニシリン耐性肺炎球菌感染症51.9人、薬剤耐性緑膿菌感染症5.28人の順であった。薬剤耐性菌感染症3疾患の総数は、前年比0.84とやや減少した。